（二〇一七年度）

7 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は22ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次のA、Bを読んで、後の問に答えよ。

A

西欧ではギリシア以来の伝統と思われるのだが、数の本性を問題にする傾向が強い。ここで数に関する諸説を紹介するつもりはないが、数学の真理性について語る関係上、経験論の代表としてJ・S・ミル（一八〇六―七三）に登場してもらおう。

ミルは[1]数学も物理学や生物学と同じような帰納的科学の一種であると考えた。つまり、数学の厳密性、真理性は絶対的なものではなく、その明証性は経験に裏づけられているというのである。たとえば、$(x+1)^2$を展開するとき、子供の頃算術をしたようには具体的事物を頭に描いて計算することはしないけれども、それは習慣によって計算過程が機械的になり、意識から消えたせいにすぎない。しかし、なぜこの計算が絶対的なものに思えるかというと、それはその過程の一歩一歩を振り返ってみるとき、たんなる記号でなく、事物について考えたことが裏づけになっていることが知られるからであると主張する。

[2]敷衍（えん）して言うなら、1＋1＝2の真理性は、一つのりんごともう一つのりんごを合わせれば二つのりんごとなるというような経験の積み重ねによって裏づけられているというのであるから、ミルの主張は多くの人を首肯させるにちがいない。

人類の精神生活の中に初等的数理がいかにして登場したかは、経験の積み重ねで説明がつくにしても、このようなレベルの経験説では数学自身の確からしさを論じることはできない。現代の数学には虚数も無理数も、非ユークリッド幾何学も、さらには非可換代数学も登場する。これらの数学は経験の裏打ちがないから正しくないのだろうか。ミルの説は小学校算術ならともかく、現代数学の真理性を論じるにはあまりにも幼稚と言わねばならない。

偉い数学者の中には、数学は経験科学であると書いている人がいる、どちらが正しいのだ、と言う読者がいるかもしれない。たとえば、小平邦彦さん。小平さんはある随筆で「数学は実験科学である」と力説されている。数学でも予測したり、直観で考えたりするから、数学は物理学などと同じ実験科学だと主張されているのである。

物理学の命題は証明されることはなく、したがって絶対的な真ではありえない。一方、直観で得られたり、計算機を使って

予想されたりした数学の命題は証明の対象であり、証明されないかぎり真ではない。

ポアンカレが言うように、直観とは全貌を見渡す力であり、錯綜した経路の中から頂上へ達する一本の道を発見する能力であるのなら、数学において直観が最大級の重要性を持つことを疑う人はいないだろう。また、数学の発見が帰納的に進む、つまりいくつもの思考実験、実例計算の中から発見が生まれてくることは高校生でも知っていることである。

しかし、[3]「演繹的に証明すること」が、物理学などの帰納的科学と数学という純然たる演繹的科学を峻別するという事実を見落としてはならない。もちろん小平さんは、数学は「経験科学」であるとか、「帰納的科学」であると主張しておられるのではない。現代数学で正しいと認められている命題が、いつかは否定されることもありうるという意味で実験科学であると考えている数学者は、現在おそらくは一人も存在しないであろう。

それはそうだが、小平さんの主張が少し極端で、誤解されやすいというのも事実である。

小平さんが、数学は人間の存在とは無関係な実在であり、数学の定理は発明されるのではなく、発見されるのだというピュタゴラス派的信念を持っておられることはいろいろな書き物から明白である。

物理現象の背後には数学的実在が厳然としてあるのだから、数学の定理は発見である。自分は鉱夫が鉱脈を掘るようにして定理にぶつかり、自然に定理を掘りあててきたにすぎないと小平さんはおっしゃっている。似たような感慨を漏らしている数学者は少なくないから、別に謙譲を装っての言葉ではなく、正直な感想と受け取ってよい。

人の信念に対しては反対のしようもないが、自分も同じように考えているかと問われれば、[4]私はまったくちがったふうに考えていると言わねばならない。

もしも数理が自然現象の奥に存在する実在で、われわれはそれを発掘しているだけなのなら、カントル（ドイツの数学者。一八四五―一九一八）が集合論を始めたとき、なぜあんなに苦しんだのだろうか。直線上の点の全体と平面上の点の全体が一対一に対応するという事実を発見したとき、なぜ「目で見ているものが信じられない」とデデキントに告白したのだろうか。

なぜ虚数というのは、長い間「存在と非存在の間にある」ものとして受け入れられなかったのだろう。なぜ負の数は、千年以

上もの間「虚構の数」とされ、方程式の解から除外されてきたのだろう。

エウクレイデスの『原論』以降、非ユークリッド幾何学が生まれるのに二千年も要したのはなぜなのか。

私には、数学のある理論が一般に受け入れられるようになり、大学院レベルないしはそれ以上であろうとも、そういう段階で理論の持つ基本的思想が普及するようになると、すなわちある意味で慣れが生じてくると、直観が働くようになると思う。つまり、集合論、解析学、代数学、なんでもよいが、ある数学の分野が確立されて、はじめて小平さんの言う「数覚」[5]なるものが生まれてくるのではないかと思うのである。そういう考え方が、いかにも自然に思われてくるのである。このように数学のある分野の基礎が定着してくると、その分野特有の数覚が働くようになり、定理が発見されるようになるのであろう。

要約して言えば、[6]集合のような基本概念は人類の発明であるが、定理は発見であると思うのである。

数学は自然現象なり、思惟的考察対象なりのパターンをその時々の都合によって認識し、名称を与えたり、法則化していった成果であるのだが、人間の観察・思考・認識は言葉による束縛など、いかんともしがたい偏向がかかっているはずである。かんたんに言えば、数学は[7]「　X　」言語なのである。だから、数学の基本概念は発明なのだというのが私の主張である。

B

近代以降における数学の驚異的な成功のせいだろうが、その普遍性に自信を持つ数学者は少なくない。宇宙のどこの知的生物でも、言葉、表現こそちがいがあれ、同一の数学を持つであろうと考えるのである。

ほとんど永久にその真偽がわからないので、こういうことは言ってみるだけであるが、私は数学というのは人類だけのものであるような気がしている。真理といったって、われわれがそう見ようとしている真理しか見ることができないのである。いくらかは苦労をして元来は備わっていなかった見方を開拓することができるけれども、人類にはもともと許されている、あるいは脳の構造上決まってしまっている範囲を超えてものを見ることはできないはずである。われわれのパターン認識には全然引っかからないパターンというものがあるにちがいないと思う。

それどころか、法則というものは因果関係の認識能力を寄り所としているが、[8] 人類以外の生物は因果関係を認識しているのだろうか。もっと平たく言えば、ヤシの実が自然落下してサルの頭に当ったとしたら、そのサルは上を見上げるだろうか？なつかしい主人の落し物があったとして、犬はその落し主を求めてあたりを捜し回るだろうか。このような能力が十全に備わって初めて、数学の理論、ないしは一般的命題というものが存在し、その証明が存在するのである。

われわれの数学はわれわれの言語をもとにして、さらに言えば、上述の因果関係の認識能力と帰納的一般化の能力をもとにして発達したものであるから、思考方法や伝達方法が異なる生物はまったくちがうパターンでものを見、考えるにちがいない。地上の生物ですら、相当な多様性があるものを、他の天体の生物の数学がいったいどんなものか、われわれには想像もつかないのであって、同じであるかないか、言うのもばかばかしいような気がする。

ラッセルはどこかで、人類史は宇宙史の最後のページの脚注にしかすぎないだろうと書いているが、私は宇宙史の中の唯一有意義な部分は、たとえ一瞬であったかもしれないが、人類によって占められているのではないかと思う。なぜなら、「有意義」というのはわれわれにとって有意義ということにほかならないからである。

したがって、宇宙のどこへ行っても知的生物は表現こそちがえ、みな同じ数学を持つはずだとか、自然の背景には厳然とした数理の世界が支配しているのだとかいった説は、私には人間の都合に合わせて宇宙が造られているという、古代からある、そして今も根強い人間中心主義の変形のように思える。[9] もっとも、こうした錯覚が学問追究を支える駆動力となっていることは否定できない。そこが人間という動物の不思議なところ、おもしろいところである。

（足立恒雄『$\sqrt{2}$の不思議』より）

〈注〉 J・S・ミル…イギリスの哲学者。 非ユークリッド幾何学、非可換代数学…現代数学の分野。 小平邦彦…日本の数学者(一九一五―一九九七)。 ポアンカレ…フランスの数学者(一八五四―一九一二)。 ピュタゴラス派…古代ギリシアの哲学者ピュタゴラスが創設したとされる教団。 デデキント…ドイツの数学者(一八三一―一九一六)。 エウクレイデス…古代ギリシアの数学者(英語名ユークリッド)。 ラッセル…イギリスの哲学者、論理学者(一八七二―一九七〇)。

問一 傍線部1はどのような意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 物理学や生物学における帰納的研究を経験に基づいて進めていくと、習慣によって計算過程が機械的になり、数学が持つ厳密性、真理性が得られるようになる。

b 数学の真理性は絶対的なものではなく、物理学や生物学と同様に経験に基づく帰納的発見を積み重ねていくことにより得られる明証性は錯覚にすぎない。

c 物理学や生物学が外界に関する経験に基づいて帰納的に法則を立てて研究するのと同様に、数学も人間が経験に基づいて研究を進める帰納的科学である。

d 物理学や生物学が外界に関する帰納的科学であるのと同様に、数学は記号に関する計算過程を帰納的に研究することによって厳密性、真理性を獲得している。

問二 傍線部2を論旨にそって言い換えれば、どのようになるか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 結論を非常に一般的な形で言えば

b 簡潔に論理的結論だけを述べれば

c さらに演繹的に推論を重ねてみれば

d 簡単な例をあげてわかりやすく言えば

問三　なぜ著者は傍線部3のように主張するのか。その根底にある著者の考えとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　数学が帰納的科学であることは事実だが、一方、数学は物理学などと違って演繹的に証明する面もあるので純粋の経験科学とも言えないから。

b　数学において直観や帰納が持つ重要性が強調されすぎることによって、物理学などの帰納的科学と数学との根本的相違がともすれば見落とされかねないから。

c　数学において実例計算が重要であることは事実だが、同じように帰納的科学である物理学などとの相違を見落とすと、数学の命題が証明されないかぎり真ではないことが説明できないから。

d　数学と同じ帰納的科学である物理学の命題は証明されることはなく、したがって絶対的真理ではありえないのに対し、数学の命題の真理性は帰納によらずとも絶対的であるから。

問四　傍線部4について、ここで著者は「私はまったくちがったふうに考えている」というが、何に不同意なのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　数学の定理を発見するには、鉱夫が鉱脈を掘るようにしないといけないという考え方。

b　数学は人間の存在とは無関係な実在であるという考え方。

c　数学においては直観が最大級の重要性を持つという考え方。

d　現代数学で正しいと認められている命題は否定されないという考え方。

問五　傍線部5の「数覚」とはどのような概念か。本文の内容から考えてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　数学的対象を捉える直観的・感覚的能力。

b　数学を考えるための普遍的・理性的能力。

c　推論を進めて数学的問題を解く一般的能力。

d　数学的証明を行うための自覚的・論理的能力。

問六　傍線部6のように著者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　人間が集合のような数学の基本概念を考え出すときには、カントルのように苦しんだ上で発明しなければならないが、一度ある意味で慣れが生じてくると直観が働くようになり、それほど苦しまずとも物理現象の背後にある数学的実在を発見できるようになるから。

b　人間が集合のような数学の基本概念を考え出すときには、数学は人間の存在とは無関係な物理現象の背後にある実体だが、そのような基本概念に一度慣れてしまえば鉱夫が鉱脈を掘るようにして定理にぶつかり掘り当てていくことができるようになるから。

c　人間が集合のような数学の基本概念を考え出すときには、その数理がまだ自然現象の奥に厳然として存在しておらず発明しなければならないが、慣れが生じて直観が働くようになれば物理現象の背後にある数学的実在を掘り出すだけで定理を発見できるから。

d　人間が集合のような数学の基本概念を考え出すときには、そのための思考・認識に人類としての偏向がかかっているに違いないが、一度そのような基本概念に慣れてしまえば直観が働いて、考察対象のパターンを発見することができるようになるから。

問七　文中の空欄[7]「　X　」に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　コンピュータ

b　欠陥

c　人工

d　経験

問八　傍線部8の「因果関係の認識能力」とはどのような能力か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　ある現象が別の現象とほぼ同時に起こるという関係を認識する能力。

b　ある現象が原因となり他の現象を引き起こすという関係を認識する能力。

c　ある現象の背後に自分にとって既知の現象があるということを認識する能力。

d　ある現象の背後に一般的命題の存在を認識し、それを証明する能力。

問九　傍線部9の「もっとも、こうした錯覚が学問追究を支える駆動力となっていることは否定できない」とはどのような状況を指しているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　自然現象の奥に厳然とした数学的世界が実在しているという錯覚が数学の普遍性・絶対性に対する自信を持たせ、そのことが学問追究の駆動力となっている。

b　宇宙のどこへ行っても知的生物はみな同様に有意義な数学を持つはずだという錯覚が、定理を発見したいとする学問追究の駆動力となっている。

c　直観や実例計算の中から帰納的に定理が生まれてくるという錯覚が、結果的に数学的発見に関わる学問追究を支える駆動力となっている。

d　人間中心主義による錯覚が因果関係の認識能力と帰納的一般化の能力を発達させて、そのことが学問追究を支える駆動力となっている。

問十　本文で著者が主張している数学観と相容れない考え方を次の中から二つ選べ。

a　物理現象の背後に人間とは無関係に厳然と存在している数学的実在を発見するのが数学である。

b　数学の発見はいくつもの思考実験、実例計算を繰り返して帰納的に進んでいくものである。

c　数学は物理学などと同様に人間の経験を基にして構築された経験科学である。

d　宇宙のどこへ行っても知的生物はみな同じ数学を持つという説は、人間中心主義からくる錯覚である。

e　数学は自然現象その他の考察対象のパターンを人間が認識し、法則化していった成果である。

二

次は、右大臣岩倉具視らによる米欧使節団（明治四年～六年・一八七一～一八七三）が帰国後に出版した報告書「米欧回覧実記」（明治十一年・一八七八刊）のうち、ライデン市（オランダ）を扱った一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

此邑は蘭国の鄒魯なり、古へ一千六百年代に、西班牙の兵、蘭国に侵入せしとき、此の地の兵勇これを拒み、勇健にして善く戦ひ、遂に寇を卻けたり、政府其の功を賞せんと欲し、何を以てするを知らず、欲する所を邑中の民に問ふ。みな一の学校を起して、末世に恵せんことを願ふ。因て其の望みに随ひて、此に大学校を起せり。其の後文学盛に進み、有名の博士を出すこと、今に陸続として名誉を墜さず。

世界各国の民は、其の宗教の信向に於て、人心の固結せること、殆ど堅牢破るべからざるに近し。其の管係は人民交際、及び政治兵力に影響をなす、多少の勢力あること、東亜細亜の道徳政治に生長せる人は、殆ど意想し能はざるべし。欧人の事務を論ずるに、必ず宗教を審にするは甚だ故あるなり。中古に当りては、欧洲十字軍の乱、近古に当りてはプロテスタントの乱、人を殺す草菅の如く、数百年の鮮血を流したり、近くは仏帝拿破侖第一世、露西亜を攻めたりしとき、拿破侖は、其の軍兵を鼓舞するに、仏国の兵威を耀かすは、此の戦にあるを以てし、其の愛国の精神を盛にせしに、露国は僧徒をして、希臘教の法敵彼にあり、此の一戦は正教の興滅に係るを以てし、其の敬神の誠を篤くせしめしに、衆みな怒気天に獅し、一斉に法敵と罵りし声は、万雷の如く、仏軍を圧せり。翌日の戦に、仏軍健闘すると雖も、露人は固より宗教をすてて生活するの念なし、一兵斃れば、一人其の銃を取て進む、勢威当るべからず。死屍山をなして、仏軍竟に潰えたり。其の他欧洲の戦をみよ、其の民心を一致する力は常に宗教にあり。而て宗教上の戦に於て、民心の怒気盛なること、獅虎の狂するが如し。蘭国の民をみるに、其の性情、深沈・温良にして、文に長じ、白耳義の強健なるに似ず。然るに西班牙王非立、当時西班牙に没日なしと謂ふ、強大の勢力を以て、此の弾丸の地、百余万の民を征して、其の威を逞する能はざりしも、宗教の力なり。非立は国内の回徒を残害し、其の惨刻苛虐を極め、併せてプロテスタント教徒の蘭国を、自己の羅馬教に就かしめんと、暴威を用ひしも、三軍可奪帥、一夫不可奪志、況や人民の宗教に熱心せるをや。蘭国の自主を遂げたるも、此の一役にあ

り、又其の慘毒の兵餡を蒙りしも、亦此の一役にあり。爾後拿破侖の兵を受けしときに当りては、朽を拉するが如く挫敗せり。後各国聯合の兵に、率先健闘したれども、[11]国威の管係は、宗教の如くに、人心を奮興せしむるに足らざるも亦明かなり。

（「米欧回覧実記」第五十三巻 海牙（ハーグ）鹿特坦（ロッテルダム）及ビ来丁（ライデン）の記）

〈注〉 此邑…この都市、即ちライデン市を云う。 蘭国…オランダ。 鄒魯…鄒は孟子、魯は孔子の出身地。 寇…外敵。 陸続…続くさま。 信向…信仰。 管係…関係。 草菅…草むら。 仏帝拿破侖第一世…ナポレオン・ボナパルト（一七六九―一八二一）、フランス軍人、フランス第一帝政皇帝（在位一八〇四―一八一五年、ロシア侵攻の結果、この間一時失脚）。 希臘教…ギリシャ正教。 翀…飛び上がる。 西班牙王非立…スペイン国王フェリペ二世（在位一五五六―一五九八年）。 回徒…イスラム教徒。 残害…迫害する。 羅馬教…カトリック。 三軍可奪帥、一夫不可奪志…（三軍ハ帥ヲ奪フベシ、一夫ハ志ヲ奪フベカラズ）「論語」子罕第九の引用。 自主…スペインからの独立。 拿破侖の兵を受けしとき…一七九四年のフランス軍のネーデルラント共和国（オランダ共和国）侵攻を指す。 朽を拉する…朽ち木を砕く。

問一 傍線部1「蘭国の鄒魯なり」とは、ライデンがどんな都市だというのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 多くの戦闘を経験した激戦地

b 多くの政争が絶えない政治中心地

c 著名な学者が多く出る学術都市

d 著名な宗教家が多く出る宗教の中心

問二　傍線部2「何を以てするを知らず、欲する所を邑中の民に問ふ」とはどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　何の報償をすべきか分らず、行なおうとする報償案を市民に提示した。
b　何の報償がよいかが分らず、どのような報償がよいか市民に希望を聞いた。
c　どのように市民が戦ったのかが分らず、しばしば用いた戦術を市民に聞いた。
d　どのように戦うべきかが判断できず、用いようとした戦術を市民に提案した。

問三　傍線部3「末世に恵せんこと」とはどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　来世のために喜捨をすること
b　来世に恩恵が受けられること
c　将来受ける恩恵を辞退すること
d　将来の役に立つことをすること

問四　傍線部4「人心の固結せること、殆ど堅牢破るべからざるに近し」とはどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　民衆の信仰心が強固なため、その信仰を揺るがすことがほとんど不可能である。
b　民衆が宗教を基盤として強く結ばれており、その団結を揺るがすことがほとんど不可能である。
c　民衆の団結が強い信仰を支えており、その団結をほんの少しでも揺るがすべきではない。
d　民衆が結ばれている基盤が宗教なので、その信仰をほんの少しでも揺るがすべきではない。

問五　傍線部5「多少の勢力あること」とはどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　大きな影響力があること

b　影響力がなくはないこと

c　影響力を持つ宗教団体がいくつかあること

d　大小さまざまな宗教団体があること

問六　傍線部6「人を殺す草菅の如く」とは何を喩えているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　人を死に至らしめる猛毒の草のような破壊的な力

b　草むらをなぎ払うように皆殺しにするためらいのなさ

c　敵を潰滅させるために草むらに待ち伏せするような狡猾さ

d　ただの草むらに死に至るような危険が待ち受けている思いがけなさ

問七　傍線部7a「仏国の兵威を耀かすは、此の戦にあるを以てし」と傍線部7b「此の一戦は正教の興滅に係るを以てし」とは、どのような意味で対照されているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　フランスは軍事力が国を統一し、ロシアは信仰心が国を統一した。

b　フランスは軍事力の誇示を兵士に訴え、ロシアは正教の保護を民衆に訴えた。

c　フランスは軍事力に基づく愛国心に重点を置き、ロシアは正教の維持を通じての信仰に重点を置いた。

d　フランスは兵士の愛国心を重要視し、ロシアは僧侶の信仰強化を重要視した。

問八　傍線部8「宗教をすてて生活するの念なし」の理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　信仰なしで日々を生きて行くという発想がないから。

b　信仰なしで日常の暮らしが成り立つとは思っていないから。

c　信仰を棄てるくらいなら死んだ方がましだと思っているから。

d　信仰を棄てて生きて行く日々に疑いを持たないから。

問九　傍線部9「勢威当るべからず」とはどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　とても歯が立たない。

b　勢いと威力が釣り合わない。

c　見かけ倒しで実戦に向かない。

d　見かけ倒しで相手にならない。

問十　傍線部10「其の威を逞する能はざりし」の理由となる本文中の語句として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　暴威を用ひしも

b　三軍可奪帥、一夫不可奪志

c　況や人民の宗教に熱心せるをや

d　民心の怒気盛なること、獅虎の狂するが如し

問十一　傍線部11「国威の管係は、宗教の如くに、人心を奮興せしむるに足らざる」と本書が強調している理由として、もっとも適切な本文中の語句を、次の中から一つ選べ。

a　其の民心を一致する力は常に宗教にあり

b　欧人の事務を論ずるに、必ず宗教を審にす

c　衆みな怒気天に翀し、一斉に法敵と罵りし声

d　東亜細亜の道徳政治に生長せる人は、殆ど意想し能はざるべし

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「正義」という言葉は当然のことながら、あまり評判が好くない。「君は正義感が強い」と言われて、それを素直に賛辞と受け取れるほど淳朴な人物は、現在では貴重な存在である。[1] 正義漢とは人を裁くことにサディスティックな悦びを見出す狂信家のこと――これが相場的イメージであろう。筒井康隆のショート・ショートに、この世であらゆる人間を告訴した正義の味方が、死後無事に天国へ行けたものの、そこには善人しかおらず、誰も弾劾できなかったので、彼は地獄の苦しみを受ける破目になったという話がある(「正義」、『笑うな』所収)。

しかし、[2] 一見逆説的とも思えるのだが、「正義」のこの不評にも拘わらず、「不正」という言葉は割合に人に好まれ、しかもある昂揚した感情を伴って使われるのが常である。「不正な政治献金」、「不正な指揮権発動」、「不正な大衆課税」、「不正に目をつぶるな」、「不正入学」、「不正な管理価格」、「権力の不正を暴く」、「蔭で不正を働く」等々、例を挙げればきりがない。社会正義の番人を自任するマスコミがこのような表現を愛用するのは驚くに当たらないが、「しらけた」大衆も「正義」がもつ大仰で面映ゆく冷笑を誘うような響きを、不思議と「不正」に対しては感じないようである。それどころか、自分が明らかに不当な取扱いを受けたと感じるとき、人々は「不正」を真剣な非難の言葉として、何のためらいもなく使うであろう。また、大抵の人間は、人が理由なく殺されたり、虐待されたり、差別されたりするのを見たとき、たとえその人が見ず知らずの他人であっても、ある義憤を感じるものである。このような場面で使われる最も自然な表現は「不正」である。

「正義」と「不正」とに対する人々の態度のこのような非対称性は多くの哲学者が既に注目している。彼らは、そこから、正義の問題は「正しさとは何か」よりも「不正とは何か」を考察することによって解明できるという着想を引き出した。しかし、一体なぜ、このような非対称的な態度を人は取るのか。

ここで直ちに思いつく一つの答えは次のようなものである。不正な行為とは義務に反した行為である。それ故その行為と行為者は非難の対象となり、人々の関心を惹かずにはいない。これに対し、正しい行為とは義務を果たす行為であって、行為者

はそれによって当たり前のことをしたにすぎず、取り立てて称賛するまでもない。称賛に値するのは、自分の命を投げ棄てて他人の命を救うというような、義務以上のことをなす行為――カトリック神学において「余分の勤め(works of supererogation)」と呼ばれるもの――だけである。従って、人間生活にとって意味のあるのは、正義の要求を満たさない行為か、その要求以上のことをする行為かであって、正義の要求を満たすだけの行為は退屈であり、固有の魅力をもたない。正義自体よりも「不正義」と「超正義」こそが人間の関心事なのである。

3 この答えは一つの興味ある論点を衝いているが、ここでの問題に対する充分な解答にはなっていない。第一に、煩悩多き人間族にとって、正しい行為は常に容易なわけではない。普通の人間なら屈してしまうような強い誘惑が存在する状況において、それに抗して正義の要求(と自ら確信するもの)に従う人は、義務以上のことをする人よりも、称賛に値する場合がある。飢えた子供を抱える貧しい労働者が、誰にも見られる虞のないときに、パン屋からパンを盗もうとしてそれを思い止まったとしよう。彼のこの行為を、税金対策に悩む金持ちの寄付活動よりも称賛したいという人は少なくないだろう。(私的所有を神格化するブルジョア倫理に毒された哀れな奴として、この労働者を嘲笑する者でさえ、ブルジョア倫理の中では労働者の行為の方が金持ちの行為よりも価値をもつことを認めるかもしれない。)正義が仮に当たり前のことであるとしても、それは眠くなったら寝るのが当たり前であるのと同じような意味で当たり前なのではない。正義の女神にとって当たり前なことは、神ならざる者どもにとっては、時として「つらい」のである。この「つらさ」に対する人間的共感を欠くところに正義漢が嫌われる一因がある。「正義」という言葉の不評に一役買っているのは、それにつきまとう正義漢のこの冷たいイメージである。先の答えはこの点を見落としている。

第二に、より重要な点であるが、正義と不正とに関する人々の態度の非対称性は、単に行為や制度のあり方に対する関心と反応という実践的態度における非対称性だけでなく、認識論的態度における非対称性をも含んでいるのである。即ち、何が正義かを問い、また答えようとする者に対して、シニカルで懐疑的な笑みを浮かべる人が、しばしば特定の行為や処置に関して「それは不正だ」という判断を確信をもって下すのである。上述の答えはこのような非対称性を説明できない。むしろ、それは

「何が正義か」についても「何が不正か」についてと同じ程度の確信を人々がもつことを前提している。

6

（井上達彦『共生の作法』より）

〈注〉筒井康隆…小説家。

問一　傍線部1について、正義漢にこのような否定的なイメージがもたれるのはなぜか。理由の一つとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　弱さを抱えもつがゆえに正しいことを行うことが時としてたいへん困難であるという、一般的な人間性に対する共感に欠けているから。

b　正義について強固な独断的見解をもっていることが多く、他の見解をかたくなに拒絶することが多いから。

c　不正を行う人にもそれなりの事情があるという、人間味のある考え方をまったく理解していないから。

d　人間であるかぎり自分自身も不正を行う可能性があるにもかかわらず、自分は常に正義を行うかのような顔をするから。

問二　傍線部2について、「一見逆説的とも思える」のはなぜか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　不正はマスコミなどによって激しく批判されるにもかかわらず、正義よりも世評が好いから。

b　「不正」は「正義」を基準にして判定されるものであるにもかかわらず、「正義」は世評が悪く、「不正」は世評が好いから。

c　一般に「正義」という語は肯定的な意味、「不正」という語は否定的な意味をもっているのに、前者は世評が悪く、後者は世評が好いから。

d　不正は憎むべきことであると一般に考えられているにもかかわらず、不正に関心を抱く人が多いから。

問三　傍線部3について、次の問いに答えよ。

I　「この答え」の内容としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　正しい行為とは義務を果たす行為であり、行って当然のことであるためとくに称賛の対象にはならないが、不正は義務に反する行為であるため非難の対象になるので、正しい行為よりも不正な行為に関心が向きがちである。

b　正しいことを行うことは義務を果たすことであり、当たり前のことなのでとくに称賛に値しないが、義務を超える善行を行うことは称賛に値するので、善行を行わないという不正のほうが関心を惹(ひ)きやすい。

c　正義の要求だけを満たす行為は地味であるため、人々の関心を引かないが、「不正義」や「超正義」など人間の悪徳や美徳を極端な形で表現する行為は派手で人々の興味を惹きやすい。

d　正義を果たす行為は社会にとって有益であり、不正な行為は社会にとって有害であるが、有害で非難の対象になるものの方が人々の注目を集めやすい。

Ⅱ 「この答え」が「充分な解答にはなっていない」のはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 人間には当たり前の正しい行為を行うことすら難しい場合があるから、人間に正義を超える行為を期待することはできず、また、正・不正の判断を下そうとする他人に対して冷笑的な態度をとる人が、自分の下す正・不正の判断には自信を持っている場合があるから。

b 正義の基準を満たすだけの行為が、状況によっては称賛に値する行為になることがあり、また、正義の基準を超える称賛に値する行為が、状況によっては当たり前の行為になることがあるから。

c 正しい行為を行うことが難しい場合もあるので、正しい行為を行うのは当たり前のことだ、と言うことは必ずしもできず、また、正しいことに懐疑的な人が確信をもって不正と判断する場合があるから。

d 状況によっては正義の基準を満たす行為すら行うことができないという、人間の弱さに対する共感に欠けており、また、一般に正義に関する判断には懐疑的で冷笑的な人が、自分自身の正義に関する判断には確信をもっているという事実を無視しているから。

問四 傍線部4について、「この労働者を嘲笑する者」がもっている思想はどのようなものと考えられるか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 自分の社会的身分に相応の規範に従うべきだという思想。

b 多くを所有する富者は人間的に堕落するという思想。

c 人間の善行・悪行を見守る神的存在などないという思想。

d すべての物はすべての人々の共有財産だという思想。

問五　傍線部5はどういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「眠くなったら寝る」ことは自然現象として当然のことではあるが、場合によっては道徳的に不正なことにもなりうる。

b　正しいことを行うことは、社会に生きる人間としては当然のことであるとしても、自然に生きる動物にとっては当然のことではない。

c　「人は正しいことをすべきである」という当たり前の規範は、それを実行するに当たっては困難を伴うものである。

d　「眠くなったら寝る」ことは健康のためにはよいことだが、その他の目的のためには必ずしもよいことではないことがある。

問六　空欄6に入れる文としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　従って、正義と不正に対する人々の態度の非対称性の説明は、他所に求められなければならない。

b　従って、正義の問題は「正しさとは何か」よりも「不正とは何か」を考察することによって解明することができる、とは言えない。

c　従って、正義と不正とに関する人々の態度の間にあるように思われた非対称性は、実は存在しないのである。

d　従って、正義をめぐる人々の態度の問題は、人間的共感と認識論の両面を加味して考察されなければならない。